

国見町下入ノ内遺跡の土師器 – 赤い土器と白い土器 –

高橋信一

1 はじめに

福島県は東北地方の最南端に位置し、南北に連なる阿武隈高地と奥羽脊梁山脈を境として三地方に区分されており、東から「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」に分かれている。昭和50年代から平成12年頃までは圃場整備・農地整備・高速道路建設などによる開発行為に伴い数多くの発掘調査が県内各地で行われてきた。

土師器の編年研究^(註1)も、これらの発掘調査による資料の増加と共に、様々な報告・研究がなされてきた。古墳時代の「南小泉式期」に限定しても、土師器杯や甕の変遷過程を軸としたもの^(註2)や器種構成の変化に注目したもの^(註3)、他県との比較研究から導きだされたもの^(註4)、そして一般的な概説^(註5)などがある。

筆者は平成20(2008)年から福島県文化財センター白河館に勤務して以降、研修や講座の講師を担当するにあたって「南小泉式期」の土師器を再度見直す機会があった。その際、福島県の「南小泉式期」研究の原点となった国見町下入ノ内遺跡の遺物を観察すると、当時気がつかなかった点が多々確認された。それは、土師器杯の色調・胎土の状況や朱塗りの有無であった。以下、本稿では、国見町下入ノ内遺跡の遺物(土師器のみ)を観察した結果、考えられることをまとめてみたい^(註6)。



図1 国見町下入ノ内遺跡位置図及び古墳群の分布

2 遺跡の概要

下入ノ内遺跡は、国見町大字西大枝字下入ノ内 27 番地に所在する。この西側 60 m 地点には阿武隈川の支流である瀧川に合流する滑川が南流している。本遺跡は、この滑川によって開析された標高 50 m 前後の河岸段丘面に立地し、その最上段は水田と果樹園、次の段の水田部には国の史跡である「阿津賀志山防塁」の内堀が、また次の段には外堀が階段状に残存する。

そもそも、下入ノ内遺跡は「阿津賀志山防塁」の調査中に発見された遺跡である。発見の経緯は次の通りである。すなわち、「阿津賀志山防塁」が想定されるすぐ西側に不自然な三角形を呈した突出部を確認したが、この箇所には「阿津賀志山防塁」と関係をもつ何らかの遺構の存在が推定された。そこで、三角形突出部中央に 30 号トレンチを設置し、表土剥ぎを開始した。表土下約 40 cm の攪乱土を除去すると、トレンチ東端より約 1 m 西側に住居の東壁ラインの一部を確認した。その後トレンチを南北に拡張し、西壁・北壁ラインを検出したが北西部はすでに削平・破壊されていることを確認した。

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡が 2 軒である。1 号住居跡は、北西部が削平されていたが、残存する形状でほぼ全容を把握することができた。2 号住居跡は、残存するプランが不明瞭で、1 号住居跡の南東部付近から、住居跡の西辺と推定されるラインとその周辺に焼土・土師器小破片が検出された。この三角形突出部は、南側に寄るほど下層まで削平・攪乱がひどく不明確である。しかし、この三角形突出部を中心とした付近には、本来 2～3 軒の竪穴住居跡が存在した可能性もある。

3 1 号住居跡

(1) 遺 構 (図 2、写真 1)

本住居跡は、前章で述べた三角形突出部の中央やや北側寄りから検出され、南西向きの緩斜面に構築されている。北西部の壁は、破壊されている。住居跡の南壁付近は、北壁と比べて検出面が深く全体的に南側に寄るに従い削平の度合が強くなる。

遺構の堆積土は、3 層に大別できる。残存している東壁付近では自然堆積の様相を呈し、検出面からの堆積土は、後世の盛土や耕作上により攪乱されている。住居跡の規模は、南北 7.3 m・



1 カマド周辺の遺物出土状況



2 貯蔵穴 (P1) 周辺の遺物出土状況

写真 1 1 号住居跡

東西7.15mを測る。推定される平面形は南側が若干狭まる方形を呈し、カマド中央を通る直線の方位は $N-2^{\circ}-E$ である。

壁は北東部ほど残存状態が良く、それぞれの辺の中央で東壁70cm・西壁65cm・北壁67cm・南壁10cmの壁高を測り、壁面は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面は、堅く締り水平で、貼床・周溝等の施設はないが床面の広範囲から遺物が出土している。

カマドは北壁中央東から天井部が潰れた状態で検出され、堆積上は4層に分かれる。袖部

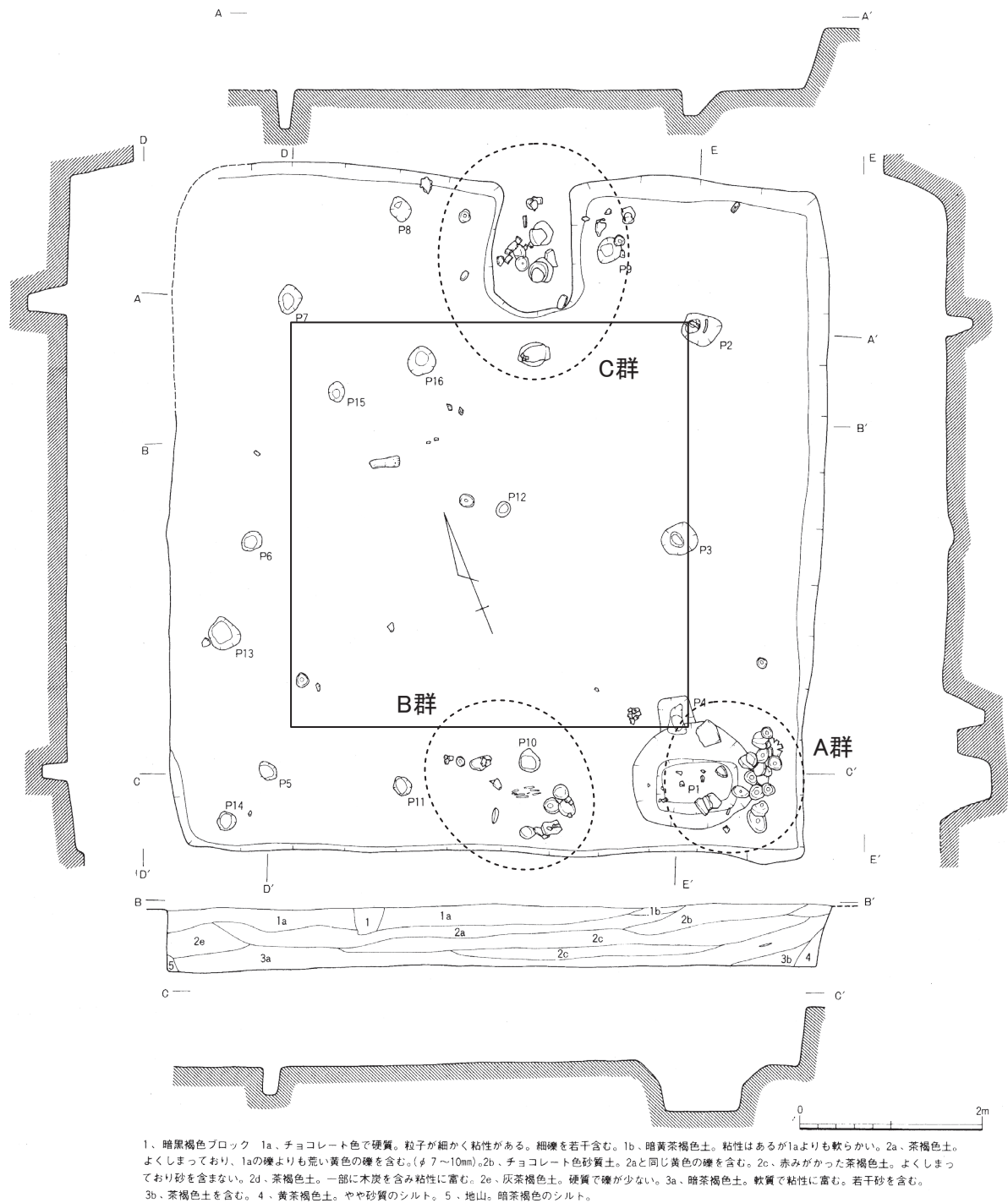


図2 1号住居跡

は黄褐色粘土で整然と構築され、奥壁に向って円弧を描くが北壁外への掘り込みは確認されなかった。カマド奥壁は北壁際にて急角度で立ち上がる。燃烧部中央には、支脚に利用されたと推定される底部欠損の杯が出土している。底面はやや皿状に凹んで堅く焼け、奥壁に接近するほど燃烧面は少なくなる。カマド奥壁から袖部先端まで約 1.3 m、焚口部の最大広幅約 75cm、燃烧部 55 × 60cm を測る。

ピットは、貯蔵穴（P 1）と柱穴状ピット（P 2～P 16）を検出した。貯蔵穴（P 1）は住居の南東部に検出され、長軸 1.4 m・短軸 1.2 m・深さ 50cm を測り、形態は長方形を呈する。底面は水平で、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。下幅で 45 × 90cm を測り、ほぼ長方形を呈する。また、貯蔵穴（P 1）の東側上幅付近から東壁にかけて 10 数個体の土師器杯が完形で出土している。

柱穴状ピット（P 2～P 16）は 15 ヲ所検出し、それぞれ大きさ（15～40cm）・深さ（6～40cm）とバラツキがあるが、住居跡に伴う柱穴と考えられ、床面から垂直に掘り込んでいる。

（2）遺物（図 3～5、表 1～3）

本住居跡からは、土師器・須恵器・石製模造品・鉄器等の遺物が出土した。土師器は杯・鉢・高坏・甕・甔、須恵器は蓋・杯・把手付椀の器種を検出し、実測可能な土器は 70 点に及ぶ。

1) 土師器の出土状況

遺物の出土状況は、住居跡内で大きく 3 つのグループに分かれる。

A 群（写真 1-2）は、南東部に検出した貯蔵穴（P 1）付近から出土した土師器杯である。P 1 の底面からは土師器杯小破片、P 1 東側壁面に密着して流れ込んだ状態で杯が 2 点、P 1 と住居跡東壁の間に床面より少し浮いた状態で折り重なるように杯が 19 点出土した。出土状態から、貯蔵穴（P 1）の南東部側には木製棚の存在が推定される。

B 群は、南壁中央東寄りから貯蔵穴（P 1）西側の間に 9 点が床面密着で出土した。

C 群（写真 1-1）は、カマドとその周辺に出土したものである。カマド東側から須恵器杯が 3 点、東側から須恵器蓋が 2 点、南側から須恵器甔が 2 点、床面に密着した状態で出土している。カマドの天井部が潰れ、両袖に狭まれた形で須恵器把手付椀が出土し、土師器甕が胴部下半を欠いて口縁部を下にし、その胴部上半部に別個体の土師器甕を差し入れた状態（入れ子状）で出土している。

その他、住居跡の中央付近から土師器杯 1 点、南西部から土師器杯と土師器高坏が各 1 点、西側寄りから石製模造品、北東寄りから鉄器がそれぞれ床面から出土している。また、カマド内の堆積土から正体不明の骨粉が多量に検出されている。

遺物の出土状態から推定すると、居住者が退去する時には日常生活に使用していた土師器や須恵器を持ち出すことなく、一括して廃棄していった可能性が考えられる。

また、比較的まとまって出土したことから、土師器杯は木製棚などに一括して保管していたと推測される。

2) 土師器の分類

本遺跡からは、多数の土師器が出土している。基本的な器種は、杯形土器・小型壺形土器・小型鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・甑形土器・甕形土器の7器種がある。各器種は細かい形態上の相違や成形・調整技法によりいくつかに分類できる。次に器種ごとに特徴を簡単にまとめておく。なお、図中の枝番号の次の()は出土地点、[]は分類を示す。また、今回の観察で実見できなかった土師器については、図中より削除し、報告文を掲載した(註7)。

杯形土器(図3-1~図4-26、図5-35) 出土土器の中で65%を占める土器群である。今回観察した土師器杯を、形態的には底部と口縁部のくびれから下記の表1のように分類した(註8)。調整技法の主なもの、横ナデ、ヘラケズリ、ヘラナデ、ヘラミガキがあり、わずかであるが刷毛目・暗文も観察される。次に部位別に調整をまとめる。口縁部:内外ともに横ナデを施している。体部:ヘラナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキを施している。ヘラミガキは、内面だけのもの、外面だけのもの、内外面ともに施さないものと、技法的に大きな特徴が観察される。底部:先の分類で丸底と平底と平底風の3種があるとしたが、丸底は大半がヘラケズリを施している。明確な平底を呈する坏には、回転ヘラケズリを施したもの(図3-1・2)(註9)や「X」のヘラ記号を施したのものもある。

小型壺形土器(図4-27~30) 器種の名称設定に苦しむ土器である。体部は球体を呈し、口縁部は直立または内湾しながら短く直立する。口縁部内外面ともに横ナデ、体部はヘラナデ・ヘラミガキを施している。

小型鉢形土器(図5-33・34・37) 小型の鉢形土器である。内外面ともに丁寧なヘラナデを施している。37は、内面下半に指頭痕が観察される。

高坏形土器 脚部破片である。脚に三孔を有する。外面はヘラミガキ、内面ヘラナデを施している。坏部と脚部の接合は不明瞭である。

器台形土器(図5-31) 体部上半を欠損している。内外面ともにヘラナデを施している。

甑形土器 完形の甑形土器である。体部は球形を呈し、目縁部は「く」の字状に外半する。調整技法は、口縁部は内外面ともに横ナデ、体部は内外面共にヘラナデ、外面に部分的にヘラミガキを施している。

甕形土器(図5-32・36・38~45) 杯形土器について個体数の多い土器で、全体の21.6%を占める。器形はバラエティーに富み、形態の特徴からいくつかに分類される。

A類:体部は球体を呈し口縁部は「く」の字状に外反する。B類:体部は卵形を呈し、口縁部は直立する。壺形土器に近い形態をとる。C類:体部は長胴気味になり、口縁部は「く」の字状に外反する。

表1 形態による土師器杯の分類

分類1	群	底部	分類2	類	特徴
	A B C	平底 平底風 丸底		I	口縁部は短く外傾し、内外面に明瞭なくびれが認められる。
		II	口縁部は短く外傾し、内外面に明瞭なくびれは不明瞭である。		
		III	口縁部は直立気味を呈し、内側に稜が認められる。		
		IV	体部から口縁部まで丸味を持ち立ち上がり、口縁部は内湾する。		

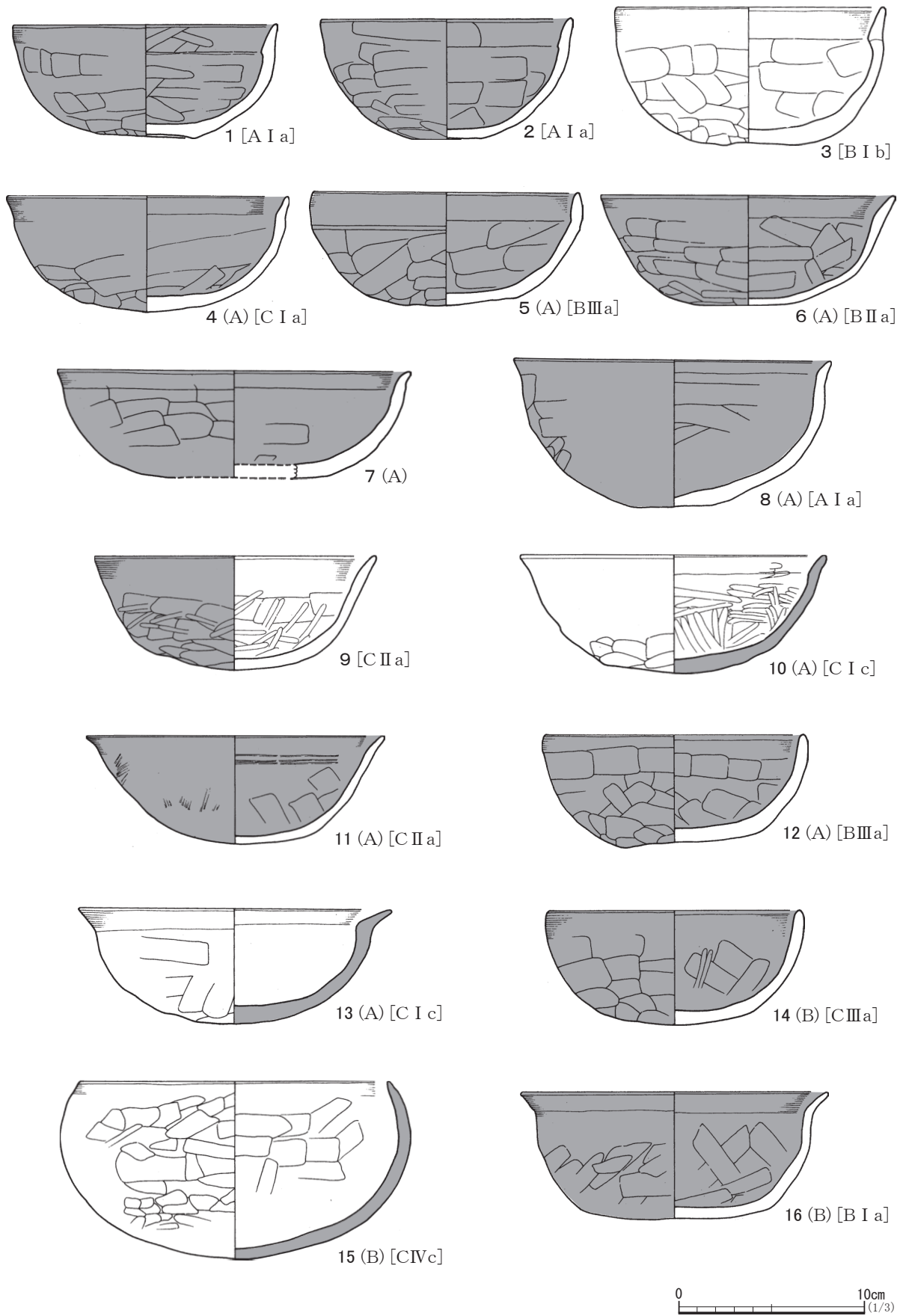


図3 1号住居跡出土土師器(1)

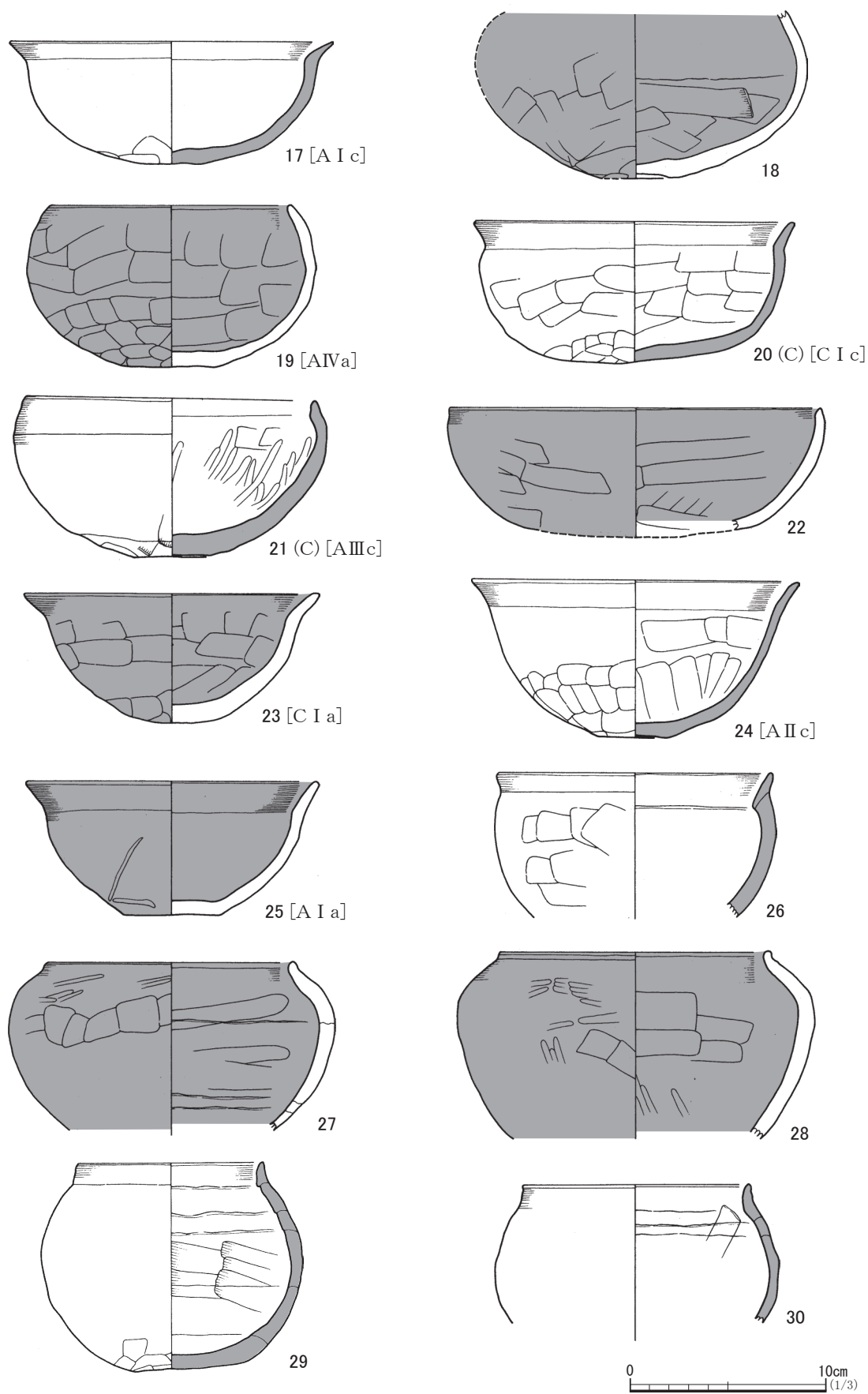


图4 1号住居跡出土土師器(2)

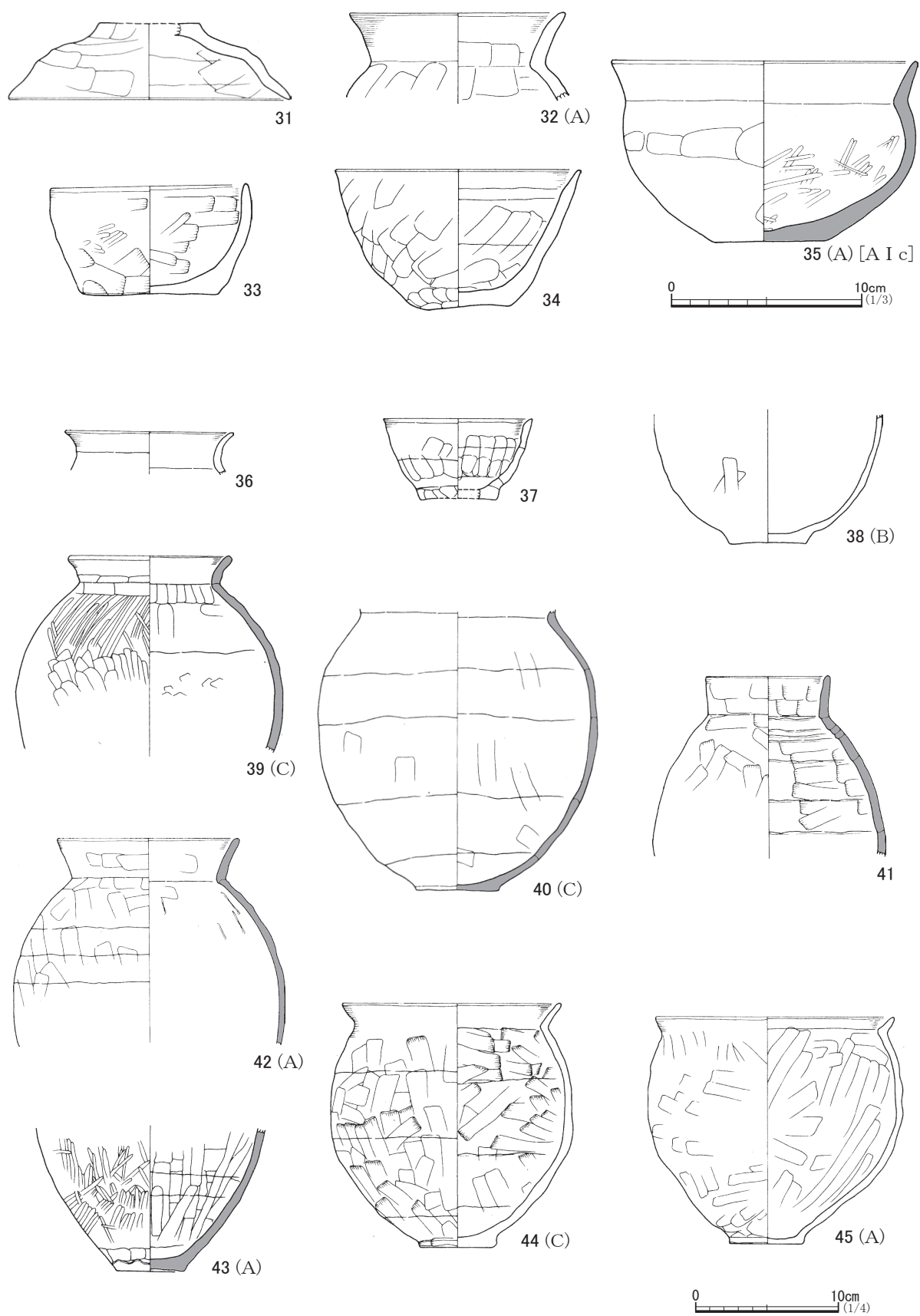


図5 1号住居跡出土土師器 (3)

3) 土師器杯の色調・胎土・朱彩による分類

国見町下入ノ内遺跡1号住居跡から出土した土師器の器面や断面を観察すると、朱塗りのもの、胎土に酸化鉄を含み土器断面や器面が赤褐色を帯びるもの、そして灰褐色の三系統の土師器の存在が確認された。そこで、ここでは出土土器の半数以上を占める土師器杯について、さらに、色調や胎土・朱彩の有無から3種に細分(表2参照)した。そして、表1と表2を組み合わせ、土師器杯を分類すると表3のようになる。

なお、図3～5の土器の網点は、器面に表示したものは朱彩、断面に表示したものは色調が赤褐色系、未表示は灰褐色系土器を示す。また、図中では、杯以外の器種にも表示した。

表2 色調・胎土・朱彩による土師器杯の分類

類	特 徴
a	器面に朱彩が施された土器(朱彩土器:丹塗土器)
b	器面の色調が灰褐色を呈し、砂粒が浮上している土器(白い土器:灰褐色系土器)
c	器面の色調と断面の外側が赤褐色を呈している土器(赤い土器:赤褐色系土器)

これまで、灰褐色系の土師器は、粘質の高い粘土などに埋没している時に、水分の影響で器面の表面変化や剥落があったものと考えられてきた。しかし今回、器面や断面の観察を通して、最初から灰褐色系の土師器であったことが確認された。下入ノ内遺跡では、この上に朱彩が施されているものが大半であった。

一方、器面及び断面が赤褐色系の土器については、かつて天栄村舞台遺跡の分析があり、胎土中に多量の酸化鉄が含まれていることが指摘されている(註10)。また、土師器製作の際に酸化鉄を含む「赤い土」を混入して焼成すれば、赤褐色系土器が完成するとの指摘もある(註11)。

なお、胎土分析は、土器製作地を推定する場合に用いられることが多いが、胎土材料を調べるための材料分析も含んでいる。すなわち、蛍光X線分析を通して土器や埴輪に含まれた土成分を元素から詳細に分析することにより、その製品の材料である土壌の産地を特定することができる。

表3 土師器杯の総合的な分類

分類	有無	分類	有無	分類	有無	分類	有無
AⅠa	○	AⅡa	—	AⅢa	—	AⅣa	○
AⅠb	—	AⅡb	—	AⅢb	—	AⅣb	—
AⅠc	○	AⅡc	○	AⅢc	○	AⅣc	—
BⅠa	○	BⅡa	○	BⅢa	○	BⅣa	—
BⅠb	○	BⅡb	—	BⅢb	—	BⅣb	—
BⅠc	—	BⅡc	—	BⅢc	—	BⅣc	—
CⅠa	○	CⅡa	○	CⅢa	○	CⅣa	—
CⅠb	—	CⅡb	—	CⅢb	—	CⅣb	—
CⅠc	○	CⅡc	—	CⅢc	—	CⅣc	○

赤褐色系土器(赤い土器)・灰褐色系土器(白い土器)に、これらの分析法を援用した研究成果を蓄積することによって、胎土の共通性や土壌の産地解明につながると考えられる。今後の検討課題としたい。

4) 小 結

今まで、筆者が確認した灰褐色系土器は、県北地区では国見町矢ノ目遺跡(註12)や同町反畑祭祀遺跡(註13)・伊達市(旧保原町)大泉みずほ遺跡(註14)など祭祀性の強い遺跡に多い気がする。また、古墳や祭祀性から考えると国見町八幡塚古墳出土の埴輪(註15)は重要である。同古墳出土埴輪の色調は、淡黄色から赤みの強い黄褐色を呈している。このことから、赤褐色系土器(赤

い土器)・灰褐色系土器(白い土器)は、埴輪の色調を意識したものとの見方もできよう。

県内の発掘調査報告書では、天栄村芹沢A遺跡^(註16)の報告に器面の色調が報告されているが、このように土師器の色調を記載した報告書は少ない。また、報告書の記載には、朱塗りや赤褐色系土器があっても、灰褐色系土器は認められない。

従来の報告書は、土師器の形態的な変化を中心に時代的な特色をとらえてきたものがほとんどである。今回、色調・胎土・朱彩の分類を加えたことにより、「南小泉式期」は、赤褐色系土器(赤い土器)・灰褐色系土器(白い土器)、そして灰褐色系土器に朱塗りを施した、3系統の土器の存在が明らかになってきた。赤褐色系土器の確立期が白河市(旧東村)佐平林遺跡^(註17)の時期とすれば、下入ノ内遺跡のような3系統の土器が混在するものから赤褐色系土器への変化をとらえることができる。

4 下入ノ内遺跡と古墳群

国見町内には、7カ所の高塚式古墳群が発見されている。このうち、堰下古墳^(註18)や森山・大木戸古墳群^(註19)・錦木塚古墳^(註20)・塚野目12号墳^(註21)の調査が実施されている。国見町内には、古墳時代中期から後期にかけての古墳群の分布が確認されている。

これに対して、集落遺跡の発見例は少なく、森山の太田川遺跡(塩釜式期)や塚野目の南寺田遺跡(南小泉式期)で、土師器器台や杯・壺・甕・高坏の破片が採集されているにすぎない^(註22)。

しかし、国見町の塚野目から徳江・森山にかけては、古代の条里制が施行されていたことが確認されている。古くからこの周辺一帯は、肥沃な土地として開墾され、これら古墳群を造営した人々の経済基盤を担っていたことがうかがえる。発見されている古墳時代の集落は数少ないが、伊達市(旧保原町)大泉みずほ遺跡^(註23)のように河岸段丘や自然堤防上に埋没している可能性が考えられる。

今回検討した下入ノ内遺跡の出土土師器を考える上でも、周辺の集落遺跡の調査事例について、今後とも注視していきたい。

5 おわりに

福島県文化財センター白河館には、福島県教育委員会が発掘調査した遺跡の出土品47,454箱(平24.3.28現在)や、調査写真・図面等の記録を一括して収蔵している。その収蔵資料の一部である国見町下入ノ内遺跡の発掘調査や整理作業が終了して、はや34年の歳月が過ぎてしまった。

今回、国見町下入ノ内遺跡出土の土師器を改めて観察することにより、器面の色調・胎土・朱彩は「南小泉式期」を考える上で、重要な視点になると考えた。このように、時代と共に研究の方法も変化し、遺物を観察する視点も異なってくるため、今回の視点を援用し、再度当該期の土師器を観察し直すと、「南小泉式期」研究の新たな方向性を示すことができると考えられる。

<註>

- (註1) 東北地方の土師器研究は、氏家和典氏の研究（氏家和典1967「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史 第14輯』東北史学会）にはじまる。
- (註2) 土師器碗や杯の変遷過程を軸としたものには以下がある。
- 高倉敏明 1976 「古墳時代の土師器を中心として」『福島県における土師器編年試論』福島県考古学会
- 玉川一郎・大越道正 1978 「大玉村上高野遺跡出土遺物の再検討 ―とくに2号住居跡出土の杯形土器を中心として―」『しのぶ考古7』しのぶ考古学会
- 高橋信一 1983 「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古8』しのぶ考古学会
- 柳沼賢治 1989 「福島県中通り地方の土師器について」『シンポジウム福島県に於ける古代土器の諸問題 ―特に5～7世紀を中心として―』万葉の里シンポジウム実行委員会
- 木元元治 1989 「福島県内の黒色土器」『東国土器研究 第4号』東国土器研究会
- 石本 弘 1995 「福島県における律令制成立以前の土器様相とその背景」『東国土器研究 第2号』東国土器研究会
- 高橋信一 1995 「福島県における南小泉式期の諸問題」『第17回福島・栃木埋蔵文化財研究協議会』
- 青山博樹 1999 「古墳時代中期～後期の土器編年」『福島考古 第40号』福島県考古学会
- 柳沼賢治 1999 「福島県における5世紀土器とその前後」『東国土器研究 第5号』東国土器研究会
- (註3) 器種構成の変化に注目したものには以下がある。
- 辻 秀人 1989 「東北古墳時代の画期について（1）―中期後半の画期とその意義―」『福島県立博物館紀要 第3号』福島県立博物館
- 藤沢 敦 1992 「引田式再論」『歴史 第79輯』東北史学会
- 佐久間正明 2000 「福島県における五世紀代の土器変遷 ―様式的側面を中心に―」『法政考古学 第26集』
- (註4) 他県との比較研究から導きだされた研究には以下がある。
- 利根川章彦 1991 「鬼高式土器の外部 ―古墳時代後期福島県域土器郡と北部関東土器群の比較検討―」『研究紀要 第8号』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信 1997 「南小泉式期の系譜と地域性 ―北関東と白河地域との交流―」『建鋒山Ⅱ』福島県西白河郡表郷村教育委員会（平成17年に白河市合併）
- 仲田茂司 1997 「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学 第4号』日本考古学協会
- 佐久間正明 2012 「福島県における五世紀代の土器変遷 ―隣接地域との並行関係の検討を中心に―」『東生 第1号』東日本古墳確立期土器検討会
- (註5) 総論的に日本国内の土器についてまとめ、東北地方の土師器について記載したものには以下がある。
- 古川一明・白鳥良一 1991 「2. 土師器の編年・東北地方」『古墳時代の研究6 ―土師器と須恵器―』雄山閣
- 加藤道男 1996 「東北地方の古墳時代の土器（土師器）」『土器事典』雄山閣
- (註6) 報文の86～92頁を一部改編してまとめた。
- 日下部善己・佐藤博重 1980 「下入ノ内遺跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告（福島県文化財調査報告書第82集）』福島県教育委員会
- (註7) 註6を参照。
- (註8) 土師器杯の形態的な分類は、（高橋信一1983「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」『しのぶ考古8』しのぶ考古学会）を参照。
- (註9) 石本弘は、古墳時代後期（栗困式期）土師器杯の製作体験を通して、当該時期の杯に回転力を利用した道具の存在を指摘している（石本弘2009「栗困式土師器杯製作技法に関する一試案 ―製作体験による報告―」『福島県文化財センター白河館研究紀要2008』福島県文化財センター白河館）。この回

転する道具を考古学研究者は「回転台」、陶芸家は「ロクロ」と呼んでいる。下入ノ内遺跡出土の土師器杯底部を観察すると、回転する道具を利用したヘラケズリの痕跡を確認することができる。

(註10) 福島県天栄村舞台遺跡から出土した赤褐色系土器について、蛍光X線分析を行い、鉄分を多く含んでいることを報告している。報文の146から151頁に分析結果が掲載されている。

玉川一郎 1981 『舞台遺跡 ー福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査ー』福島県岩瀬郡天栄村教育委員会

(註11) 石本弘氏のご教示による。

(註12) 橋本博幸 1980 「矢ノ目遺跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告(福島県文化財調査報告書 第82集)』福島県教育委員会

(註13) 目黒吉明他 1972 「反畑祭祀遺跡発掘調査」『国見の文化財(国見町文化財調査報告書 第1集)』国見町教育委員会

(註14) 土沼章一他 2000 「金華山塚古墳群・熊野塚古墳群・大泉みずほ古墳群」『大泉みずほ遺跡発掘調査報告書(保原町文化財調査報告書 第15集)』保原町教育委員会

(註15) 高倉敏明 1984 「国見町八幡塚古墳出土の埴輪について」『福島考古 第25号』福島県考古学会
八幡塚古墳は塚野目古墳群の1号墳で径40mの円墳と確認されていたが、昭和50(1975)年の確認調査で全長66~68mの前方後円墳であることが確認された。

(註16) 石本 弘 1991 「芹沢A遺跡」『国営総合農地開発事業矢吹地区遺跡発掘調査報告7(福島県文化財調査報告書第248集)』福島県教育委員会

報文中において、器面が暗赤褐色から橙色・赤褐色を呈する土器群とされているものが赤褐色系土器である。

(註17) 目黒吉明他 1978 「佐平林遺跡(I~IV、V区)」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告II(福島県文化財調査報告書第67集)』福島県教育委員会

(註18) 目黒吉明他 1972 「堰下古墳」『国見の文化財(国見町文化財調査報告書 第1集)』国見町教育委員会

(註19) 目黒吉明他 1974 「森山古墳群・大木戸古墳群」『国見の文化財(国見町文化財調査報告書 第3集)』国見町教育委員会

(註20) 山中雄志他 1994 『錦木塚古墳発掘調査報告書 ー塚野目4号墳ー(桑折町埋蔵文化財調査報告書11)』桑折町教育委員会

錦木塚古墳は、塚野目古墳群の一部で行政区画では桑折町に所在する。平成4(1992)年度に保存と活用をかねて、学術調査が行われた。

(註21) 目黒吉明他 1990 『塚野目12号墳調査報告(国見町文化財調査報告書 第8集)』国見町教育委員会

(註22) 高倉敏明・柴田俊彰 1977 「第2章古代 第1節 古墳と豪族」『国見町史第1巻』国見町

(註23) 前掲註14を参照。

【挿図出典】

- ・図1…筆者作成。
- ・図2~5…註6文献より転載・加工して作成。

【写真出典】

- ・写真1・2…当館収蔵の写真を使用。